

海を越えた厨川文芸論の

受容と再燃の理由をさぐる

後藤 岩奈

まず、この著書の表題にもある厨川白

村であるが、現在の日本ではあまり目や耳にすることが多くない名前であるが、彼はいつたいどのような人物なのであるうか。筆者の手元にある文学事典等の記載を要約すると、厨川白村、一八八〇年生。英文学者・文芸評論家。京都出身。本名辰夫。東京帝国大学で小泉八雲、夏

目漱石、上田敏について英文学を専攻。その後、第五高等学校、第三高等学校、京都帝大で教鞭をとる。日本で初めて西洋文芸思潮を体系的に紹介した『近代文学十講』『文芸思潮論』を出版。評論『象牙の塔を出て』『近代の恋愛観』『十字街頭を往く』などは当時の青年層に大いに読まれたが、一九二三年関東大震災の津波で死去。死後の一九二四年、彼の文芸

論である『苦悶の象徴』が出版される。

筆者は胡風の文芸思想、胡風の厨川白村文芸理論からの影響を調べるため、厨川の著作に目を通したことがある。そこで厨川の文芸理論書『苦悶の象徴』中の創作論の内容を、筆者なりの言葉で要約してみる。厨川は文芸の基礎を「強大なる二つの力の衝突から生ずる苦悶懊悩」に置き、「自由と解放を求めてやまざる生命の力」は「絶えず内よりわれら人間の心胸を熱しつつ」、燃え上がっている、とする。一方で人間は、近代社会の「制度法律軍備警察等のあらゆる制圧機関」『生活難』『国家至上主義』『資本万能主義』などの抑圧から脱するわけには行かない。また二つの力の衝突は、自己の生命と外界からの強制抑圧との間だけでな

工藤貴正著

中国語圏における厨川白村現象

— 隆盛・衰退・回帰と継続

A5判 三三四頁

[六、三〇〇円] 思文閣出版

く、人間は自己そのもののうちに、二つの矛盾した要求をも持っている。このように精神と物質、霊と肉、理想と現実との間には絶えざる不調和があり不断の衝突葛藤がある。厨川はフロイトの精神分析学説を借用して、生命が抑圧を受けるところに生じる苦悶、懊悩が文芸の根底であり、その表現法が象徴主義であるとす。二つの力の衝突葛藤から生じる苦悶懊悩は心的傷害となつて「無意識」界の奥深くに葬り去られる。作家が飽くまでも忠実に客観の相をありの儘に再現しようという態度に出て、始めて作家の無意識心理の底から、その自我や個性が無理をせずに渾然として自然の儘に表現

される。これが生の苦悶の象徴化で、ここに至って客観主義の極致は主観主義と一致し、理想主義の極致はまた現実主義と合一して、そこに真の生命の表現たる創作が出来あがる(改造社版『厨川白村全集』二巻、一九三〇年、二一九―一七五頁)。

『中国語圏における厨川白村現象』の著者工藤貴正氏は、「厨川白村現象」という概念について、次のように書いている。「日本では、彗星のように現れ、大いに流行した厨川白村(一八八〇・一一・一九―一九三三・九・二)の著作が、彼の死後、急速に忘れ去られてしまった。これに対して、中国語圏(大陸・中国・台湾を中心に、香港までを視野に入れた地域)の知識人たちの間では、夏目漱石、森鷗外、芥川龍之介、川端康成などの日本を代表する作家たち以上に知名度が高い。そのうえ、日本人の著作としては、現在の村上春樹に匹敵するぐらいかなり系統的に翻訳され、しかも、時代を超えて各地域の特性に根ざして活き続けてきた現象を指している」(三頁)。本書では、厨川白村著作

が日本でどのような評価を受けたのか、中国語に翻訳されたテキストを通して、大陸・中国の民国文壇の知識人どのように受容されたのか、また、翻訳された厨川文体の特徴とはいかなるものだったのか、台湾ではどのように人気を維持されたのか、そして一九八〇年以降、大陸・中国で厨川白村および彼の著作が再び熱烈に受容されている事実について、現状を分析し、その理由を説明しようとする。

まず、厨川白村の著書の分類がなされる。文芸思潮という観点から欧米文学を紹介した概説書、文明批評家及び社会批評家としての評論、文芸理論の概説書、詩文学の研究書の、四つの系統、九作品に整理されている。そして一九一二年に初版が出版された『近代文学十講』から一九二四年に第五〇版が出版された『苦悶の象徴』まで、「ほぼ十二年の間に何度も版を重ね、そのうえ、当時の新聞、雑誌にこれらの著作の意義について論評されるほどの反響とブームを惹き起していたこと」(五七頁)を明らかにし、当時

■中国語話者のための日本語教育研究会

研究会趣旨…日中対照研究の成果を生かして学習者の母語によるフランスの転移とマイナスの転移を体系的にとらえ、中国語話者に対する理想的な日本語教育について考えます。

第16回 テーマ研究会発足記念研究会

▼7月17日(土)14時～18時▼京都外国語大学7号館4F742教室(阪急西院駅から徒歩18分。または阪急西院・京都駅からバスあり)
▼申し込み不要・参加費無料。*懇親会あり
【プログラムより】

「日本語名詞修飾節の習得過程…類型論的アプローチ」大関浩美(麗澤大学)

「日本語と中国語の連体修飾表現の輪郭」

張麟声(大阪府立大学)

「日本語の連体修飾の「と、いう」と中国語の相応表現の対照研究」

王彩麗(神戸市外国語大学大学院)

▼連絡先 第16回研究会担当委員…中俣尚己(yakmt_n@yahoo.co.jp) / 中国語話者のための日本語教育研究会事務局…庵功雄(isoionicourante.plata.or.jp) / 大阪府立大学中国語話者のための日本語教育研究所事務局・張麟声(chizhang@icosakatu-u.ac.jp)
▼詳細 http://www.lcosakatu-u.ac.jp/staff/zhang_lm_chinese_event1.htm

の書評や人物評から、その評価が褒貶二つに分かれる理由を探っている。英文学者戸川秋骨は『近代文学十講』に対し「この著作は初学者向きの概説書としては高尚すぎ、近代文学を専門的に学ぶ大学のテキストであり、現代の欧州文学をこれ程まで料理し纏めあげた学殖とその手腕」を評価をする（五八頁）。ロシア文学者片山伸は「それぞれの地域の中で、自然主義や新浪漫主義などの特徴が丹念に扱われないこと」に不満を表し、フランス文学者廣瀬哲士は「『文芸思潮論』の二項対立的な分析法を都合の好いもの」としている（五八頁）。山川菊栄ら社会主義思想に共感を寄せる知識人は、「象牙の塔を出て』に対して「時流に身を投じることに長けた流行の評論家として扱われ、彼の評論も唯物論的歴史観に基づけば社会改造と国民性の改造を区別する論理は許されない」と批判する（五八頁）。『近代の恋愛観』について、土田杏村は「厨川の提示した形而上の二元論を統合するような『靈肉合一論』には誤解が生じる

こと」を指摘している（五八頁）。

中国における厨川の翻訳、紹介は、魯迅や豊子愷など民国文壇の八人の翻訳者によってなされた十一種類八作品で、「一人の日本人の著作がこれだけ系統的に翻訳されているという事実だけでも注目に値する状況である」という（六五頁）。『苦悶の象徴』が民国文壇の知識人に与えた影響力は大きく、特に日本で結成された文学団体「創造社」のメンバーたちの受容は著しく、また魯迅、劉大杰、夏丏尊の翻訳意図は、「厨川白村が繰り返し広げた日本人の国民性批判や文明批判に共感するところから発したものであり、厨川の国民性批判を対岸の火事とは見ずに、中国人の国民性にも日本人と同様の病が巣食っていることを伝えようとするところにあった」という（七七―七八頁）。さらに「厨川白村の流れるように美しい文体で表現するエッセイ風のスタイルを、民国文壇の知識人に紹介しよう」という意図もあったという（七八頁）。

厨川著作の翻訳文体について。厨川著

作の中国語への翻訳者は、厨川が使った単語を「できる限りそのまま中国語へ移そうとする傾向」が見られる（二六四頁）。また魯迅訳『苦悶の象徴』の、「できる限り日本語の修飾関係を維持し、語順の入れ換えを避けながらも、中国語としてのリズムの良さを活かす」という特徴も挙げている（二六四頁）。これらの特徴は「日本語を解さない知識人が厨川白村文体の美しさを直接に実感する大きな要因」であったという（一六五頁）。

さらに、厨川文芸論の中国知識人の間の普及と共鳴の例として、浙江省の中学教師王耘菴が一九二九年に編んだテキスト『文学概論』が、本間久雄『新文学概論』と厨川の『苦悶の象徴』『象牙の塔を出て』の影響を受けていたこと（二一―五頁）、また台湾での厨川白村普及について、一九三〇年代に入り一時終結するが、一九五七年から二〇〇二年まで、最低十二種類の厨川著作が出版され、そのうち六種類が七〇年代に集中していたこと（二七〇頁）などが明らかにされて

いる。

戦後日本における厨川の評価については、工藤氏は、「日本が高度成長期に入ると、急速に忘れ去られてしまう。実は、忘れ去られたのではなく、著作としての存在価値を認められなかったのだろう」とし(二八一―二八二頁)、「厨川の著作は、専門領域の研究を得意とし、細分化された知識を道具に、まっすぐに西洋の「近代」に向けて突進した日本の知識人にはあまり好まれないものとなった」と推定している(二八二頁)。一方中国では、一九七〇年代末の改革開放、特に一九九二年の鄧小平「南巡講話」以降、西洋現代主義的な文芸論も「近代化」を目指す体制イデオロギーとして肯定されてゆく中で(二七三頁)、「厨川の文芸論は文芸心理学(唯心論)と文芸社会学(唯物論)の合流・結合がなされた文芸理論として高く評価」されることになり(二八三頁)、八〇年代以降の中国での厨川著作の受容の再燃現象の理由について、「厨川が提唱した二元論合一・統合の問題」が、「政

治は共産党が掌握し個人の行動を統制し、経済は自由競争主義の市場経済が個人の生活を支配する、というまさしく二元論の世界」で、決して矛盾と見なされなくなった(三二五頁)、と述べている。

最後に筆者の些細な体験を述べてみる。前述のように、胡風の厨川白村文芸論からの影響を調べるため厨川の著作に目を通したが、「文芸論」というと、どうも抽象的な、難解な語句が並んでいるイメージがあるが(実際、厨川の文章もそうであるが)、初めて『苦悶の象徴』を読んだとき、意外とスラスラと読めて、「ああ、オレでも読めた」と何か「分かった」ような気分になり、その後、むしろ自分で小説を書いてみたくなった記憶がある。以下は筆者の勝手な憶測であるが、文学活動において、学問的な完璧さ、論理の整合性も大切だと思われるが、それ以上に、何かを「創る」ことにおいては、ある種の精神状態、「思い」や「情熱」(中国語でいうところの「熱情」)が必要なのかもしれない。厨川の著作には、そう

いった面でも人を「衝き動かす」ものを含んでいるのかもしれない。中国語圏では厨川の著作のそのようなところが好まれているのかも……などと考えてみた。

工藤氏のこの著書では、多くの資料の丹念な調査、整理、分析によって中国語圏での厨川白村現象の実状が明らかにされているのみならず、文学活動で大切なものについて考えさせる内容も含んでいると思われる。この著書が、日本における厨川白村再評価の起爆剤となれば良いな、と思う。

(ことう・いわな 新潟県立大学)

■横浜ユーラシア文化館企画展

遊牧世界の造形―人と暮らす動物たち

▼5月22日(土)〜9月5日(日)9時30分〜17時

*毎週月曜日休館。ただし7月19日(月・祝)開

館、翌7月20日(火)休館。▼横浜ユーラシア文化館 横浜市中区日本大通12

▼一般五〇〇円

▼小・中学生二五〇円*毎週土曜日は小・中学生、高校生無料

▼横浜ユーラシア文化館主催

▼横浜市教育委員会共催▼お問合せ・横浜ユーラシア文化館 ☎045-6632424

URL: <http://www.eurasia.city.yokohama.jp/>